

地元の就職増やすには？

京都工繊大の学生と移住者らが座談会

学生の専門分野を地域活性化へ

地元で就職して地域の産業を支える若者を増やそうと、京都工芸繊維大学(京都市左京区、森迫清貴学長)が今、府北部を対象エリアとして取り組みを始めている。府北部に理工系やサービス経営人材の育成拠点を置くことで地域活性化を図り、いずれば若者定着につなげたい考え。13日夜には「綾部地域連携室」を置く青野町の北部産業創造センターで「大学と地域の連携」をテーマにした座談会を開き、今後の方向性を模索した。

【重本晋平】



移住者を囲み学生らが意見交流をした(青野町で)

文部科学省が提唱する「事業」に採択された同創生テックプログラム「地(知)の拠点大」大学では2016(平)ムをスタート。府北部学による地方創生推進成28)年から、「地域」に人材育成拠点を設置することにより

理工系・サービス経営人材を輩出し地域活性化を図る▽大学卒業後に地元で就職し地域産業を支える若者を増やす―ことを目的として取り組んでいる。

具体的には、学生は3年前の期までは京都市内の松ヶ崎キャンパスで教育プログラムを受けているが、3年の後期からは福知山市の福知山キャンパスへ活動の場を移す。そこで地元企業から講師を招いたセミナーやインタ

ーシップなどに取り組むほか、理工系の専門知識を生かして課題解決型の実践的・能動的なプログラムにも挑戦する。「綾部地域連携室」も大学と地域が連携していくための拠点の一つだ。

今回、地域連携を模索する目的で開かれた地域住民との座談会では、住民側の代表としてそれぞれ数年前に市外から移住した3人が出席。同大学の学生のほか、事務職員や教員らも加わって率直な意見交換を行った。

住民側からは「過疎化が進んでいる地域の小学校を絡めたプログラムが出来ないか」「まず継続して地域に通うことから始め、地元の人と親しくなっていきたい」といった大学へ向けた要望が挙がった。

一方で学生からは「自分の専門分野を生かしてつつ地域活性化につなげていけるような動きが出来たらいいと思う」「府北部について知る授業がもっとあれば」「大学生になって地元

の綾部に関わる機会が増え、親しみを感じている。授業以外の場でも何かプロジェクトが出来たら」といった積極的な声が続出した。地域創生テックプログラム長を務める桑原教彰教授は、「農業×テクノロジー」などキーワードは見えてくるが、今ある地域課題と

学生が持つ専門性をどう結び付けていくのか「今後の課題」と締めくくり、継続的に地域と関わりを持ち続けることが大切だと力説し、これを足掛かりとしていきたい考えを示した。